

女性の「働き方」から考える、アラフォー世代への期待と課題

アラフォー世代の多様な生き方は、多様な働き方につながっています。特に女性では派遣、契約社員などの非正規雇用で働く人の割合が多く、働き方にまつわる様々な問題も生じています。そこで社会保険労務士の北川美雪さん、就職支援事業に携わる内田美紀子さんに、アラフォー世代の働き方についてのご意見を伺いました。



社会保険労務士 北川美雪さん

法律や雇用条件を理解し、納得のいく働き方を



社会保険労務士として企業側と雇用者側、双方からの人事、労務関係の相談に対応しています。企業側は常に優秀な人材の確保を望んでいます。最近では不況のため人件費削減についての相談が急増しています。労働基準法をはじめとする労働・社会保険関係の法律は、そのほとんどが、労働者保護をうたっています。ただ、雇用者側が法律をよく把握していません。契約内容の理解不足から生じるトラブルが多いのが現状です。今はもう「会社がなんとかしてくれる」という時代ではありません。働くことも契約のひとつであるという認識を持ち、企業側、雇用者側ともに義務と権利を確認してください。

近頃よく話題になる非正規雇用の問題では、派遣切りや雇止めなどネガティブな問題ばかりが報じられますが、実際には派遣をスムーズに活用している企業、

雇用者もたくさん存在します。派遣のメリットとデメリット、派遣法改正の背景などを理解したうえで、各々が納得のいく働き方を選ぶのが賢明だと思います。

40歳前後の女性の仕事に対する意識は多様です。仕事の能力を評価して欲しいと願いつつ、家族を優先して夫の扶養の範囲内で働いている方。正社員で働き続け、収入やキャリアは順調だけれども、多忙でプライベートなゆとりが持てない方。それぞれに大変だと思えますが、これからは少子高齢化で女性が仕事をする期間も今まで以上に長くなるでしょう。人生後半の生活設計を考えるにあたって、40歳前後の時期に、「働くこと」の意味を改めて考える時間も必要だと思えます。



さまざまな言葉が飛び交うように配置された「アラフォー 50代 語録」の言葉たち。

- 焦るもんか 漱石は39に猫を養ふ
- ジェスチャーは ケータイではなく ダイヤルまわす
- それぞれの親の介護がぶらぶらがる
- まだ捨てぬ バブルで買った ダブルのスーツ
- 成果主義 昨日の部下が今日上司
- 「アラフォー」の次は「大人女子」 洒落た言葉に助けられ
- 20年先はまだまだ見えなくても 気合いを入れて踏み出す一歩
- 家買ったあとは夫をもらうだけ
- 鬼の顔イジでも食べぬ豆40粒
- 「アラフォー」で人生すごろく一休み 思えば遠くへ来たもんだ
- 20年先が見えない20代
- まだいけるまだいける で、どこへいこうか40歳
- アラフォーの前向きさにちょっとヒク
- 気をつけよう かつてのワンレン 今オバケ

アラフォー女性の パワーとエネルギーが、 未来を拓く



財団法人・満井就職支援奨学財団 事務局長 キャリアアドバイザー 内田美紀子さん

内田美紀子さん

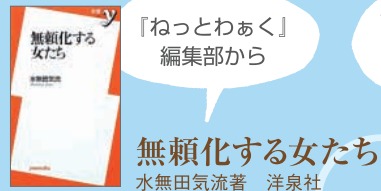
日頃は、夢実現に向けて頑張っている学生達の支援や、女性の再就職支援などを行っています。アラフォー世代の女性たちは、正社員組も再就職のパート組も、既に社会の中でポジションを確立している方も多いように感じます。今はその下の世代、30代半ばくらいの女性たちが働く場を得るのが大変です。結婚退職して子育てに専念し、そろそろ社会復帰したい、夫の収入も不況で減っている。でも、特技や資格がないから仕事に就けない。そんな悩みをよく耳にします。

また、女性が働くことについて、パートナーである男性側の意識も世代によって大きく異なります。40代は、仕事第一主義の時代を生きてきたので、まだ「男は仕事、女は家庭」という意識が根強く、概ね保守的。30代は、夫だけの収入では家計が厳しいから妻の仕事にも理解があり、その分家事や育

児への参加も積極的です。さらに20代になると、「人生で大切なのは仕事だけではない」と考える男性が増え、仕事や家事に対する性差意識は少なくなっています。

先日、大学生から「バリバリ働くってどういうことですか？」と聞かれました。彼らにとって「バリバリ」は死語のようです。「無理せず、穏やかに、最低限の暮らしができればいい」。そう考える若者が増えています。これも時代の移り変わりでしょう。

アラフォーは、エネルギーを秘めた最後の世代ではないでしょうか。特に女性は逞しいです。バブルやその後の不況を乗り越え、組織にこだわらず起業したり、フリーで活躍している方々がたくさんいます。一歩踏み出す勇氣とパワー。アラフォー女性たちの元気が、これからの日本をけん引していくのかもしれない。



『ねっとわあく』編集部から
株式会社キャリア・クリエイト
人材コンサルタント
杉山孝さん

その幸運は偶然ではないんです！
J.D.クランボルト 著 花田光世 訳
ダイヤモンド社

自分自身の『キャリア』を真剣に考えている人の話に耳を傾けてみると、「資格取得のために目標を定めて頑張っている」「希望の『キャリア』を積むために転職の準備をすすめている」といった話がよく出てきます。

とはいえ、周到に準備をして「資格取得」したり、「希望の会社に転職」出来たとしても、それだけで『キャリア』に関する悩みが解消されるとは限りません。むしろ、幸せな『キャリア』を歩んでいる人は、「変化の中にあるチャンスを自らものにした」という方が多い様に感じます。

この本には、そんな幸せな『キャリア』を歩んでいる人が、困難をどう克服し、変化を乗り切っていたのかが書かれています。

「変化の芽をチャンスととらえ、自ら積極的に幸運をつかみとる」、なんていうのもアリなんじゃないでしょうか。

SBSメディアサービス株式会社
M・S事業部編集室 室長
石垣詩野さん

愛について語るときに我々の語ること
レイモンド・カーヴァー 著
村上春樹 訳
中央公論新社(1990年初版)



この本が出版された1988年の日本は、今思えば奇妙な寂寥感に包まれたカーニバルのようだ。誰もが半ばやけくそのようにバブルの渦に飛び込んで、遅れまいと必死になっていた。やがてその膿が吹き出す'90年代を目前に、私たちは戦後の日本が夢見た世界は幻想なんじゃないかという疑念を何とかごまかそうとしていたのかもしれない。

カーヴァーの描く世界はいつも天気雨のように奇妙な感触だ。不安や美しさ、ユーモラスな空気をちちに孕んだ、不思議な孤独に晒されている。それは絶対的価値の失われてしまったポストモダンの世界に生きる今の私たちとよく似てはいないだろうか。

それでも、ありふれた人生に深い眼差しを注ぐ作家が最後に与えるのは、どこか温かな読後感だ。それを愛と呼べるのか。答えはまだ見つかっていないが。

「最近の女子は」。あなたなら、このフレーズのあとにどんな言葉が続けますか？「肉食系になった」「社会進出が進んだ」「婚活に勤しんでいる」…etc.このように現代女性を彩る言葉たちを並べてみると、一貫して強くなった女性像に辿り着くのではないのでしょうか。時代を彩る言葉たちには、その時代を読み取るヒントが含まれているといっても過言ではありません。この本はそんな言葉たちが、詩人である著者の静かな目線によって、女性をとりまく状況や女性自身の心境に姿を変え見えてきます。

また、タイトル「無頼化する女たち」も著者ならではの鋭い切り口。普通の幸せがインフレを起こし、やさぐれたニッポン女子を社会的自立と文化規範からの逸脱した状態と書かれているのですが、この言葉は著者も述べているとおり、奥が深く様々な解釈ができます。ぜひこの本を読んで、「最近の女子は」に続く言葉について考えてください。

「男女共同参画」はじめての一步!

Books & Cinemas



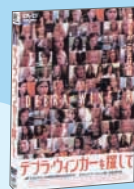
静岡大学
人文学部言語文化学科 准教授
森本隆子さん

結婚帝国 女の岐れ道
上野千鶴子・信田さよ子 共著 講談社

ポスト男女雇用均等世代にして非婚少子化現象の先頭バッター。仕事にも性にも「自由な選択」を許されてきたかに見えるアラフォー世代へ、鋭く切り込む一冊です。

外では男社会に頭打ち、女としての賞味期限にもそろそろ驕りが始まって…。名実ともに女の自立が果たされきっていない「結婚帝国—ニッポン社会>」にあって、貴女は泣く泣く「結婚」に自分の存在証明を見つけていますか。それとも愛や家族の幻想から醒めて「結婚難民」の自由を選び取りますか。ちょっとどぎついキャッチコピーの背景にあるのは、拘束からの解放に見えたものが、実は恋愛幻想、家族の絆といった既成の価値観の単なる崩壊にすぎなかったのではないかという厳しい現実認識です。

さすがは「おひとりさま」論の上野先生とDV救急隊の信田先生。青春を送ったバブル期さながらに、軽やかで華やかな自由の裏側で空虚な淋しさを背負い続けるアラフォー世代を前に、議論は丁々発止と爽やかです。



あざれあ図書室司書
菊川真紀子さん

『デブラ・ウィンガーを探して』

監督 ロザンナ・アークウェット
販売元 ポニー・キャニオン

雇用均法第一世代として、働く女性の道を切り拓いてきたアラフォーの先輩たちへ、アラサーからオススメするのは『デブラ・ウィンガーを探して』。

40代に突入し、女優業と母親業の両立に悩んだハリウッド女優のロザンナ・アークウェット。彼女は、人気絶頂期に「家族のため」に引退を選んだ憧れの女優デブラ・ウィンガーや、他の40代の女優達に、仕事や家庭、子育ての体験を聞くため、自らビデオをまわしてインタビューします。一対一で語られた女優たちの赤裸々な本音からわかるのは、ハリウッドにも根強い「性差別」「年齢差別」が存在しているということ。

これは、普通の女性がずっと闘ってきた差別の構造と同じもの。この作品が撮られた2002年から8年経った現在でも、「仕事と家庭」は女性を悩ませるテーマですが、あと10年後には果たしてどんな状況になっているのでしょうか。あざれあ図書室で貸し出し中です。

社会学者で詩人でもある水無田気流さんに、今回のテーマの総括をお願いしました。座談会でも問題になっていた女性の雇用環境をいかに整え、健全なワーク・ライフ・バランスを実現するか。どうやら、水無田さんの考える「ハッピーリスク」という視点が、この問題を解決する一つの糸口になりそうです。



水無田気流 (みなした・きりう)
詩人・社会学者。第1詩集『音速平和』で中原中也賞。最新評論に『無頼化する女たち』。



41歳世代が示す日本の今後

四一歳、というのと、一般にどのような人たちをイメージしますか。「働き盛り」「社会の屋台骨」「家庭も仕事も大忙し」といったものが挙げられるのではないのでしょうか。たしかにこの世代は、さまざまな意味で責任ある世代といえます。ただしこのイメージは、今日かならずしも、すべての人に過不足なく当てはまるわけではありませぬ。というのも、これは高度成長期に確立した「標準世帯」(両親と子ども二人程度)の家族モデルや、「大黒柱の夫+専業主婦の妻」の労働観を、基底に抱えているからです。これに比べれば、現在の四一歳は、多様な働き方・暮らし方をしているでしょう。

今日では、多くの人が、女性の就労を当然視しています。九七年以降、サラリーマン世帯でも専業主婦のいる世帯を共働き世帯が上回り、いまや働く既婚女性も堂々たる多数派。しかし、一方で女性の職場環境が整備されたとは言いがたい現状があります。現在、日本の女性就労者は、過半数が非正規雇用です。また、たとえ年間を通じた給与所得者で

あっても七割近くが年収三〇〇万円以下。背景には、主たる稼ぎ手は夫という「家族賃金」モデルがあります。これは、女性就労を「内助の功」でよし、とみなすものです。

本誌の座談会の中で、非正規雇用の女性二人が、「自分の収入だけで生活できるか」との問いに対し、即座に「無理」と答えていたのは、印象的でした。近年喧伝される「ワーク・ライフ・バランス」も、理念は大変素晴らしいですが、現実には女性の雇用環境が改善されなければ、絵に描いた餅といえるでしょう。

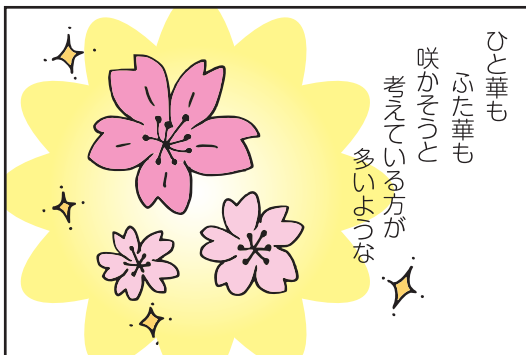
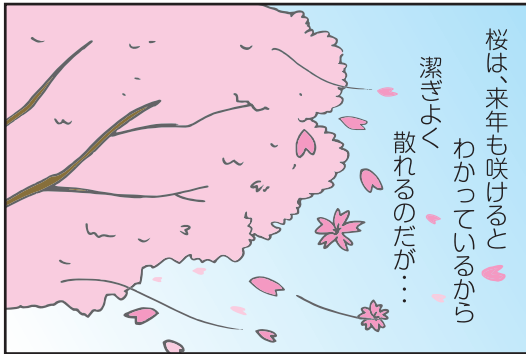
日本の家族関連行動や、世帯構成も、ここ二〇年で急速に変わりました。近年では、標準世帯を単独世帯が上回るなど、「おひとりさま」単位でのライフスタイルが、それほど珍しくなくなっています。「標準世帯家族像」を横目でらみつつも、自分の人生とは身の丈に合わないからシングルやDINKS、という人も大勢いるでしょう。

ただし、それらは個々の人たちが、自らの幸福のため選択した

結果であるべきです。たとえば、結婚したいのにできない、子どもが産みたいけれども産めない、そうした希望の断念が一般化しないためにも、今こそ実効力のある、リアルな「ワーク・ライフ・バランス」を模索すべきです。それが、多くの人の幸福に寄与すると考えます。幸福になるためにかけたコストが、「元本割れ」する確率。私はこれを、「ハッピーリスク」と呼んでいます。今の日本は、これが高いのです。背景には、グローバル化や日本型雇用慣行の崩壊など、経済社会構造の変化により、既存の「普通の幸せ」が高騰したことが挙げられます。

四一歳世代は、経済社会構造の激変をその職業史に刻み、同時に家族関連行動の変化を個人史のなかに体現してきました。現在までつらなる社会変化の先兵といえます。バブル最終世代でもあり、これ以降の世代に比べ、理想に対する信頼を失っていないのも特徴です。この世代の「実感」は、今後の日本を占ううえで、貴重な材料となるでしょう。

サクラサク…?



56号の感想をお寄せ下さい

- ◆QRコードから
 - ◆E-mail kouryuukaigi@ka.tnc.ne.jp
 - ◆FAX 054-251-5085
- いずれかの方法をお願いします。



編集委員

※左から

- 編集長 西岡あおい
- 増渕礼子
- 村田美千子
- アドバイザー 平野雅彦
- デザイナー 利根川初美
- 川野泰寛
- 大畑結香



編集後記

●40歳は人生の折り返し、とよく言うけれど、私はまだ見ぬ未来へ向かいずっと前進していきたい。どこまで夢は叶い、どこに到達できるのか。それが分からないから人生は面白い、成長できるのだと思っている。

(編集長・西岡あおい)

●もし「バブル景気」という現象がなかったら、今のアラフォー世代はまた違う歳の重ね方をしてきたのでしょうか。でも歴史に「もしも」はないのです。アラフォー世代の10年、20年後はどうなっているんだろう。それを見届けるためには、私自身も長生きしなくちゃ!

(増渕礼子)

●知らずに時代の先端を歩み、良くも悪くも自由な生き方をつくってきた。自分の年代を改めて深く掘り下げてみると、変わっていないようでけっこう変わっている。結婚観とか仕事環境とか。でも子どもの頃想像してた未来図では、車はタイヤがなくて宙を浮いていたけど。

(村田美千子)

●40歳と41歳、41歳と42歳、この間でいったいどんな違いがあるのだろう。何も変わらないのではないかな。そう思う人もいるだろう。だが、時代という分母が世代へ与える影響は大きい。そこを丁寧に観ていく作業が大切なのだ。今では懐かしい「時代なんかバツと変わる」というウスキーのコピーが結構的を射ている。

(アドバイザー・平野雅彦)

●私もアラフォーの一人。最近、不景気の中でもエネルギーに動く同年代(もしくはアラフィフ)の仲間に出会う機会が多く、元気をもらっています。少々暑苦しくてもアラフォーのパワーは今の時代に必要ですね!

(デザイナー・利根川初美)

●「41歳」という世代と接することは非常に興味深いことでしたが、「現代社会」でも学ぶ「バブル」という一時代を謳歌した人と若い世代のギャップに悩まされる日々でした。しかし、終わってみると、あの世代の前向きさに少しだけ感化された自分がいました。

(川野泰寛)

●20代の私にとって41歳の自分は、未知の自分です。一体どんな道を選んでそこに辿り着くのか想像もつきませんが、ネガティブな言葉が飛び交う昨今も、ポジティブに乗り越え、素敵な41歳を目指したいと思います。

(大畑結香)

編集員募集

- 募集人員/若干名
- 編集作業/『ねっとわあく』の取材、発行などに携わります。年間16日前後(取材時を除く)
- 作業会場/静岡市駿河区馬淵1丁目17-1「あざれあ」
- 募集期間/平成22年3月10日(水)~4月10日(土)
- 問合せ先/あざれあ交流会議グループ TEL 054-250-8147 E-mail epoca@azarea.pref.shizuoka.jp
- その他/日当、交通費支給



ねっとわあく

2010/3/10 Vol.56

発行日/平成22年3月10日
〒422-8063 静岡市駿河区馬淵1丁目17-1
企画・編集・発行/あざれあ交流会議グループ
TEL/054-250-8147 FAX/054-251-5085
デザイン・823design 利根川初美